審査の結果の要旨

氏名　サンティリアン・カリン・パレデス
Santillan , Caryn　Paredes

論文題目　A study on Bipolarity in the architecture of Leandro V. Locsin
（レアンドロ・V・ロクシンの建築における二極性に関する研究）

この論文は、フィリピンの代表的な建築家レアンドロ・ロクシンの作品をとりあげ、二極性を軸に展開したそのデザインの特異性を明らかにするとともに、作品が担った歴史的、社会的意味を考察することによってフィリピンの文化と建築に関する基本的かつ包括的な知見を得ることを目的としている。

本論文は、五つの章で構成される。
第 1 章では、研究の目的や背景、研究方法、論文の構成について説明するほか、既往研究について概観している。
フィリピンが長期にわたって東洋と西洋の融合的な文化をはぐくんできたこと、建築にもそれが反映されていること、フィリピン近代建築が発展したのは戦後であることなどを確認したうえで、研究の目的として、1）フィリピン建築の展開には多様な諸因子−極性が影響してきたこと、2）ロクシンの作品では物体、空間形態の両面において対立する二つの極性−二極性が繰返される際立った特質であること、の二つを解明することとされる。研究の手順として既往研究の踏査、建築を視知覚的特徴から理解する意味と方法の検討、フィリピンにおける現地調査と資料収集、分析と考察へと進むこと、また、建築は形態を軸として様々な意味を総合するものという認識から、分析は作品の視覚的特徴の形態分析を軸に進められることが説明される。

第 2 章では、フィリピン建築の歴史が概観され、その展開が大きく四つの時期に分かれることが示される。第一のプレスペイン土着建築期はワンルームの高

床式住居によって特徴付けられる。第二のスペイン植民期には、土着の技術とヨーロッパの伝統が融合され、それに続くアメリカ植民期には社会の近代化、インフラの整備が進んだ。最期の戦後期に至ってフィリピンにおける近代建築の展開が始まった。

第 3 章では、ロクシンが建築の創作活動開始前に研究した諸分野を確認し、それらが彼の作品形成に与えた影響を検討する。研究はフィリピンの考古、歴史、土着建築、音楽、フィリピン近代芸術など多岐にわたり、それら全てがロクシンの Filipino（フィリピン的な）建築の探究につながったことをが示される。

第 4 章では、初期から最晩期にいたるまでの代表的なロクシンの作品 70 をとりあげ、作品の外観と内部空間について形態分析を行なっている。外観は物体形態として、内部は空間形態としてそれぞれの基本的なまとまりと構成、視覚的力動感を表現する図を作成、特徴を整理している。
分析の結果、ロクシンの作品ではいくつかの特徴的な二極性が一つのデザインの中に統合され、デザインの最も強い特質となっていること、その二極性には四つタイプが存在することなどが明らかにされる。すなわち、第一の二極性は「浮きあがる効果（floating effect)」。第二は「地上に縛られた離陸(grounded flight)」。第三は「閉じられた開放性(enclosed openness)」。そして第四に「対立する空間的特徴の交替(alternation of opposite spatial characters)」である。第一のものは、浮き上がる量塊が、視覚的な浮力と重力の葛藤を示す。量塊は単一な塊と複数の面があり、浮力には垂直方向、斜方向、そして曲線的方向に働く三つがある。第二のものは、大地に繋ぎ止めようとする力と大地から離れようとする力の葛藤である。つなぎ止められる量塊は「浮き上がる効果」のケースと異なり単純な矩形とはならず、また地上と視覚的に連続していること等が特徴である。第三のものは、空間の中の中心における視覚的開放性と囲繞性の葛藤である。視覚的に外部とつながる空間的中心のまわりに、多重に用意される透過性のある囲みのデザインが中心への直接的なアクセスを妨げるとともに、内部性の反復的表現をもたらす。第四のものは広い主空間と狭い残余的空間の対比である。両者が交替しながら継起的に配列され、相互の分離が際立ち、同時に統合されるとする。

第５章では、4 章までの分析を踏まえ、結論としての考察が示される。一つはロクシンのデザインを特徴づけるダイナミズムが、二極性の統合形態によって生み出されていること、ことに内部空間における二極性の統合、継起的連続には、連続的な空間統合と明確な空間分節という洋の東西で異なる空間的伝統が融合されていること、こうした二極性が全体としてロクシンやフィリピンの建築が背負ってきた土着的伝統と近代性、東洋と西洋といった二つの世界にまたがる文化的背景を映していたこと、そして、ロクシンのデザインにおける軽い表現から重い表現への変遷が、フィリピンの政治的状況の変化、ことに戦後発展期の社会的対立に対応し、それを引き受けるものであったことなどの見解が示される。
最期にこれらを総括し、ロクシンはデザインに二極性を導入し、それを利用することによってフィリピンの土着的な形の本質を近代的な方法で解釈し直すことができたこと、それ故にまた、ロクシンの作品は単にフィリピンの文化や伝統のシンボルというだけでなく、フィリピン人が自らの伝統について考える際の、思考の基点となりうるシンボルとして位置付けられる。

以上のように、本論文は、フィリピンの代表的建築家でありながらこれまで明確にされていなかったレアンドロ・ロクシンの作品の具体的特質を綿密な調査と実証的な分析に基づき解明するとともに、それらを広くフィリピンの特異な歴史的、社会的、文化的背景の中に位置付けることによって、文化的なコンテクストの中に生きる建築家が導き生成させる建築デザインの実相を理解するための基本的な知見を示し、建築デザイン論研究の分野に大きな寄与をなしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。